



人文学部准教授  
小山 憲司

こやまけんじ  
修士(社会情報学)  
専門分野は、図書館情報学

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧いただけます。  
<http://www.mie-u.ac.jp/links/research/>

右図／附属図書館でのパソコン利用の様子

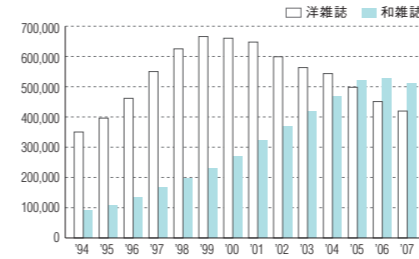


## 学術情報利用の変化を実証的に明らかにし、 大学図書館の新たな可能性を探究する。

インターネットの普及によって学術情報の電子化が進み、国内外の論文や研究成果が簡単に入手できるようになってきました。こうした情報環境の変化のなか、人文学部では、大学図書館がどのような機能を持つべきか、どのような役割を担うべきかを研究するとともに、附属図書館と共同で情報リテラシー教育の展開や開発も進めています。

### 学術情報環境の電子化がもたらしたもの

私たち大学の教員は、自らの研究成果を次の研究に活かしたり、社会に還元したり、そこで得られた知見を大学教育にも役立てています。研究成果の多くは論文として学術雑誌に投稿され、編集者や査読者によるチェックを受けてから雑誌に掲載されます。こうした学術雑誌の多くが、ここ10年ほどのインターネットの普及と情報技術の発達にともない、電子版、すなわち電子ジャーナルとして提供されるようになってきました。ある研究成果が「イギリスの科学雑誌Nature電子版に掲載された」といった報道を見聞きしたことのある人も多いのではないのでしょうか。学術雑誌の電子化は、特に海外出版社が積極的に行っています。たとえば、学協会出版社協会(ALPSP)が2008年に行った調査によれば、海外の主な出版社は自然科学系の96.1%、人文社会科学系の86.5%の学術雑誌を電子ジャーナルとして提供しています。学術雑誌の電子化により教員や学生は、研究室や教室、あるいは自宅のパソコンから、学術雑誌に掲載された論文を検索し、PDFなどによって論文そのものを入手できるようになってきています。



文献複写依頼件数の推移 (図1)



NIIが提供するデータベースCiNii(サイニー) (図2)



三重大学MIUSE (図3)

### 国内の学術情報流通の変化

世界中で発行される学術雑誌を一つの大学図書館で収集することは不可能です。そこで、国内の大学図書館は国立情報学研究所(NII)が運営するNACSIS-ILLというシステムを通じて、学術雑誌の相互利用を図っています。利用者が求める論文が掲載された学術雑誌を、その大学図書館で所蔵していない場合、他の大学図書館に依頼して論文のコピーを利用者に提供するのです。私は共同研究者とともに、NACSIS-ILLシステムを通じて行われた1994年から2007年までの文献複写のやりとりを分析しています。具体的には、複写依頼のあった文献(論文)を、海外の学術雑誌(洋雑誌)に掲載されたものと国内(和雑誌)のものに分け、その推移を検討しました(図1)。その結果、洋雑誌に掲載された論文への依頼件数は1999年度の約67万件から、2007年度には約42万件へと減少(約37%減)していたことを確認しました。海外の学術雑誌が2000年前後に電子ジャーナルとして提供され始めたこと、また国内の大学図書館において、2002年度以降それらの利用契約が進められたことが減少の要因として考えられます。一方、和雑誌論文への依頼は2006年度まで増加を続け、2007年度に減少しています。増加の要因はいくつか考えられます。例えば、どの雑誌にどのような論文が掲載されているかを検索できるデータベースが2000年以降、次々とインターネット上で提供されるようになり(図2)、論文の発見が容易になったこともその一つです。ただし、検索された論文が電子的に入手できるようになれば、洋雑誌と同様、複写依頼件数そのものが減少することになります。最近では、電子ジャーナルとして提供される和雑誌も増加しつつあり、そうした和雑誌では複写依頼件数が減少する傾向が認められます。

### 機関リポジトリと三重大学MIUSE

国内の大学や研究機関でも、さまざまな研究成果の電子化を進めています。そのサービスは機関リポジトリと呼ばれ、インターネット上で提供されています。国内では2004年に始まったNIIによる機関リポジトリ構築支援を端緒として、2009年5月現在、107の機関リポジトリが公開されています。三重大学では、2007年3月に三重大学学術機関リポジトリ研究教育成果コレクションMIUSE(図3)を正式公開し、学術論文をはじめ約4,600の研究成果が提供されています。私自身は、東京大学在籍中から機関リポジトリの構築事業に携わっています。機関リポジトリには、各大学が発行する大学紀要と呼ばれる学術雑誌が数多く収録されています。大学は機関リポジトリを通じて、これまで多くの学術雑誌に点在していた大学としての研究成果を、一つのまとまったコレクションとして提示することができます。研究成果そのものの提供と同時に、大学としての社会的責任を果たすという意味でも、機関リポジトリの役割は大きくなっていくものと考えられます。

### 大学図書館と情報リテラシー教育

数多くの学術情報が電子的に入手できるようになりつつありますが、自分の欲しい情報を発見し活用するには、適切な知識や技術が必要です。大学図書館では、図書館の利用法から効果的な文献探索法まで、さまざまなプログラムを開発し提供してきました。今後は、電子的情報環境をも考慮に入れた、より包括的な情報リテラシー教育の開発・提供が大学図書館の大きな機能の一つとなることでしょう。情報リテラシー教育の展開や開発もまた私の研究テーマであり、現在、附属図書館との共同研究も進めています。